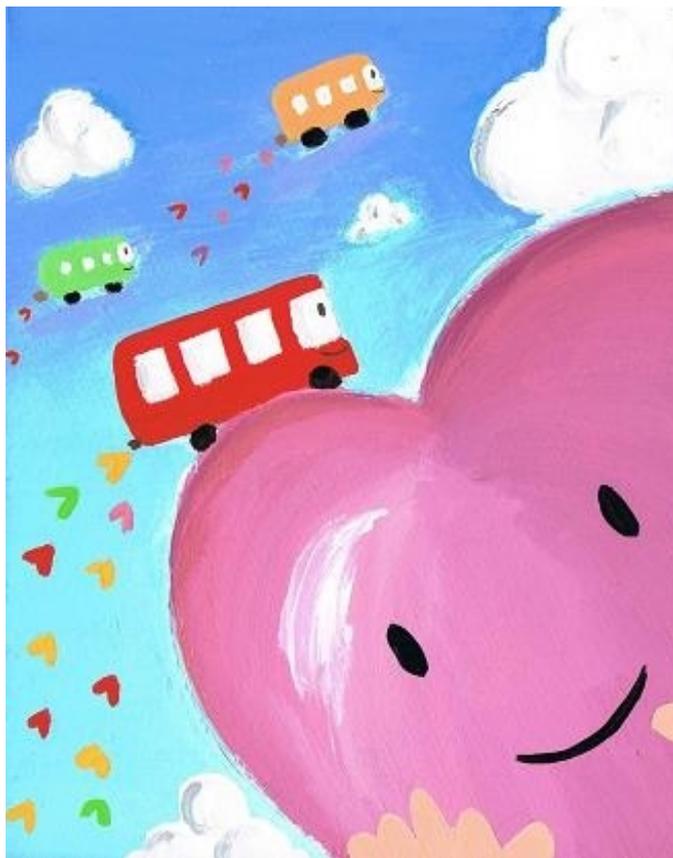


140字の物語

おしきりゆう



遠足の面白さは、
バスの席順で決まると思う。

目的地よりも、
誰と一緒に座るか。

きっと彼は後ろの席。
小心者の私は前の席。

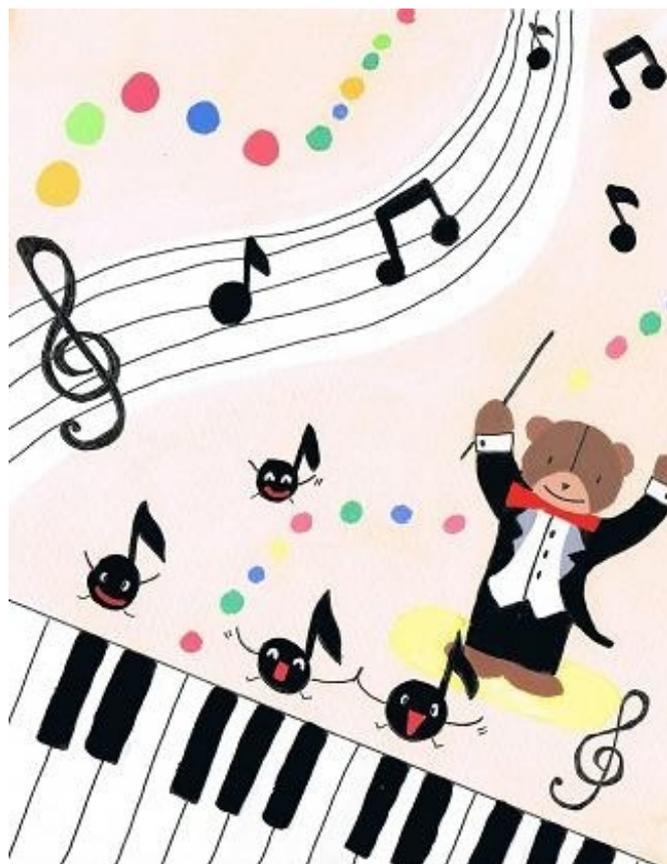
一人窓の外を眺めていると 「隣、いい？」

見ると、後ろにいるはずの彼の姿が。

驚く私に彼は笑う

「後ろは酔うんだ」

楽しさと恥ずかしさに乗せて、バスが動き出す。



ピアノの練習が進まぬ夜。

ふうーっと溜息をつくと、
楽譜から音符が飛び出した！

鍵盤の上を、楽しそうに飛び跳ねる音符たち。

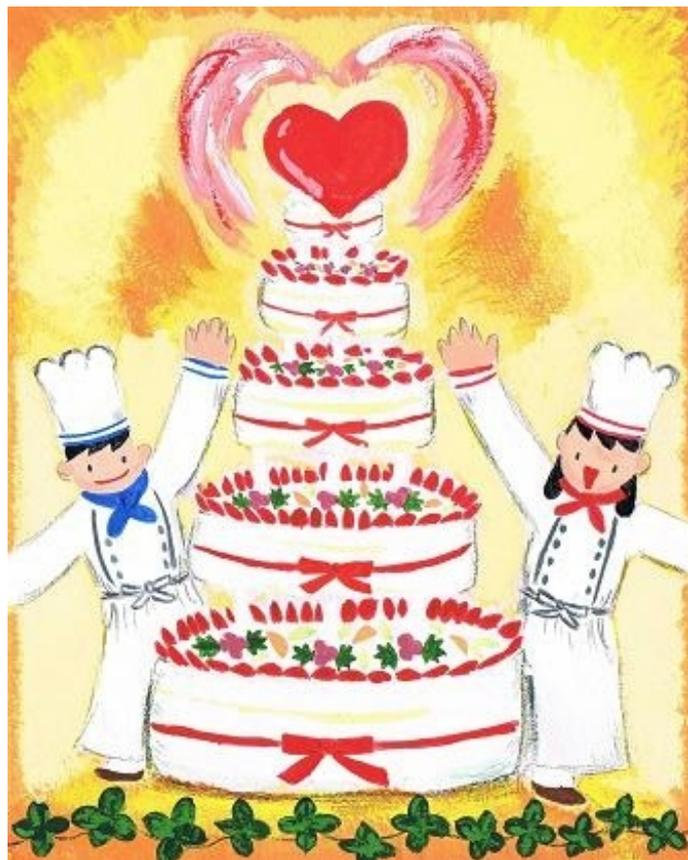
それを指で追うと、一曲完成。

何だか楽しいぞ。

何度も繰り返していると「コケッココー」

窓から漏れる朝日を浴びながら、

音符たちは楽譜へ帰っていく。



僕は毎日ケーキを焼く。

顔も知らない誰かのために、ケーキを焼く。

お陰様で土日は寝る間もないほど繁盛で。

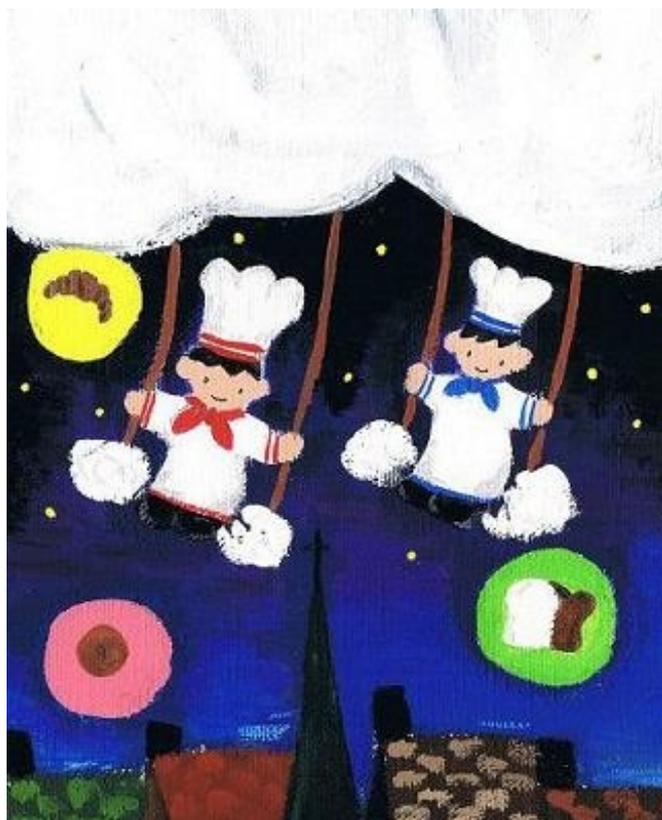
今夜も明日に向けて厨房に籠もっていると、
メールが届いた。

「無理しないでね」

明日は僕と彼女の結婚式。

今僕は、初めて自分の幸せのために

ウェディングケーキを焼いている。



街の電気が消える頃、

あちこちの屋根から、
もくもくと綿菓子のようなものが上がってくる。

これは皆が見ている夢。

僕らはそれを集めてパンを焼くのが仕事。

楽しい夢は甘くておいしいけど、
怖い夢は少し苦い。

そんな時は特性シュガーでおまじない。

明日は皆が楽しい夢を見れますようにと。



心にぽっかりとあいた穴。

まるでドーナツみたいで可愛かったので、
市場へ売りに行った。

でも、実際は苦くて、辛くて。

おまけに冷え切った私のドーナツは、
ちっとも売れなかった。

しょんぼりとした帰り道。
あなたと出会った。

あまく、よく膨らんだドーナツは、
もう穴さえ見えない。



僕の仕事は、雲をとりに行くこと。

真夏の雲は、綿菓子のように甘くて、
夜店で大人気。

今日もお祭りに備えて、
空に梯子をかけると雲を掴む。

へへ、ちょっと味見してみよう。

僕はひと握りの雲を頬張ったが、
思いのほか甘くない。

見れば、空の色が少し違う。

ああ、もうすぐ夏が終わる。



幸せが落ちていた。

暗い夜道で穏やかな光を放つ幸せ。

手に取ると、柔らかくてほんわりと温かい。

このままポケットに入れるのは簡単だけど、
これは誰かが落としたものだから。

私は幸せをぎゅっと握ると、交番へ向かう。

ちゃんと持ち主の元へ戻りますように。

幸せは、自分で育てるもの。